世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

付箋を用いた英語授業研究協議：若手英語教師の成長

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2018-03-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小菅, 敦子, 小菅, 和也
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/742

付箋を用いた英語授業研究協議
―若手英語教師の成長―

Study Meetings Using Comment Notes
to Improve English Lessons

小　菅　敦　子*
KOSUGE Atsuko
小　菅　和　也†
KOSUGE Kazuya

1．研究の背景

1.1　授業研究の必要性と問題点

中学校や高等学校における英語授業研究は、各学校や研究会、学会などで幅広く行われている。教師が授業を改善し、教師として成長していくためには有効な方法であると思われる。しかしながら、現実には、1回限りの公開授業や授業映像に基づく研究協議であることが多く、協議会参加者の発言も、授業者の労をねぎらう意味合いが強く、率直な意見がなかなか出にくい。また、意見があっても雑多な感想レベルにとどまり、長期的な授業改善に役立てるには不十分である。１回50分の授業にも膨大な変数が含まれており、授業を系統的に分析することはそもそも大変困難である。

継続的な授業研究の例として、一般財団法人語学教育研究所が行っている「授業研究」（小菅2017）は注目に値する。この「授業研究」では、ひとりの教師の授業を、数回（４，５回であることが多い）にわたり、映像に記録し、その都度、授業者と研究員（中高大の英語教員や英語教員志望の学生）が集まって、映像や指導案を見ながら検討会を行い、意見交換をして、授業改善を図る試みである。その期間は、ひとりの教師についてほぼ半年間にわたる。しかし、この「授業研究」においても、検討会での参加者の発言を記録して分析する、というところまでは行われていない。

1.2　付箋による授業研究

授業の研究協議における参加者の発言を、記録し分析するための手段として、ワークショップ型授業研究（村川2010）の考え方がある。研究協議の参加者が、授業に関する意見を付箋に書き出し、それをすべて白板等に貼り出して、それをもとに意見交換をするという試みである。この方法の大きな利点は、一部の参加者のみが発言する研究協議とは異なり、参加者全員の意見が

*武蔵野大学兼任講師　†武蔵野大学教育学部

提示されることである。これによって研究協議の協働的側面も強まる。しかし、ひとりの教師の複数回にわたる授業や、同じ教材を用いた複数の教師の比較をしようとすると、困難が生じる。そのためには、複数の授業を比較するための共通の枠組が必要となる。この枠組のひとつの提案が「英語授業研究のためのフレームワーク」（望月・小菅　2016,2017a,2017b）である。これについては、2.2で述べる。

1.3　本稿の目的

本研究は、教員歴3年目の若手高校英語教師が、教師としてどのように成長するかを見るために、その授業を3年間10回ビデオ撮影し、後日授業研究協議を行ったプロジェクトの一部である。平成26年度高校2年生のコミュニケーション英語IIの授業を４回ビデオ撮影し、研究協議を行った。平成27年度、28年度はそれぞれ3年生と1年生のコミュニケーション英語ⅢとⅠの授業を3回ずつビデオ撮影し、付箋を用いたワークショップ型授業研究を行った。

本稿では平成27年度と28年度の6回の研究協議で書かれた付箋のコメントを分析の対象とした。分析の視点はさまざま考えられるが、本稿は、授業の変化・改善、ひいては教師としての成長に関わる重要な要素が何であるかを明らかにしようとする、ひとつの試みである。

２．データと分析方法

2.1　授業および授業観察者による検討会の概要

2.1.1　授業の概要

ある公立高校のひとりの若手英語教師による、平成27年度（第１～３回）は3年生の授業、平成28年度（第４～６回）は、1年生の授業を分析する。計6回の授業の概要は以下の通りである。

(1) 第1回：平成27年4月28日

・教科書：*Genius English Communication III*（大修館書店）

Lesson 1　Step into a New World

・授業の目標：

a）Students will actively participate in group work.

b）Students will respond to their group members properly.

・授業の概要：

地下水の見つけ方について3つの選択肢から1つを選び、その理由を答えさせる。そのあと、4人のグループで議論し、グループの結論を発表させた。

(2) 第2回：平成27年10月13日

・教科書：*Genius English Communication III*（大修館書店）

Lesson 4　Quest for Traditional Colors

・授業の目標：

a）Students will actively participate in pair work.

b）Students will understand who Yoshioka Sachio is.

・授業の概要：

平安時代の布地の染め色を再現しようとする吉岡幸男さんについての文章を、チャートに情報転移させる活動をさせる。その後、音読し、オーラルサマリーをさせる。

(3) 第３回：平成27年11月17日

・教科書：*Genius English Communication III*（大修館書店）

Lesson 6　Crosscultural Communication

・授業の目標：

Students will understand the cultural difference between British employees and South Asian employees by reading the text.

・授業の概要：

イントネーションなど小さな言葉の違いが相手に与える影響が違うという異文化コミュニケーションについての文章を読み、ＴＦに答えさせたあと、チャートに情報転移させ、音読させる。

(4) 第４回：平成28年６月２日

・教科書：*Element English Communication I*（啓林館）

Lesson 2　Christian the Lion

・授業の目標：

Students will understand John and Ace's life with Christian the Lion.

・授業の概要：

子どものライオンをペットとして買うイギリス人の２人の若者についての文章を読んで、理解したことについてペアで語りあう活動、本文を聞く活動、読んでＴＦに答える活動を行った。

(5) 第５回：平成28年９月29日

・教科書：*Element English Communication I*（啓林館）

Lesson 4　Twice Bombed, Twice Survived

・授業の目標：

a) Students will cooperate with each other in pair work.

b) Students will summarize Part 1 by using easy words that their partners understand.

c) Students will understand what Barack Obama talked about in Prague.

d) Students will understand the new words in Part 1 and use them in the activities.

・授業の概要：

オバマ大統領がプラハで行った核兵器なき世界の演説についての文章を読み、サマリーを完成させる活動、実際のオバマ大統領の演説を聞く活動を行った。

(6) 第６回：平成28年１月19日

・教科書：*Element English Communication I*（啓林館）

Lesson 8　The Boy Who Harnessed the Wind

・授業の目標：

a) Students will cooperate with each other in pair work.

b) Students will share their ideas about electricity use.

c) Students will understand what happened in Malawi.

d）Students will understand some of the new words and phrases.

・授業の概要：

マラウイで風力発電機を作った少年についての文章をもとに、電気がない暮らしについてペアで話す活動、本文のリスニング活動、リーディング活動を行った。

2.1.2　授業観察者による研究協議の概要

それぞれの授業について、後日、授業者と参加者（高校・大学の教員７～11名、回によって参加人数は異なる）が集まり、授業映像を見て、付箋（7.5cm×7.5cm）にコメントを書き出し、これをすべて白板に貼り出して検討した。付箋の内容は、大きく「良い点」と「疑問・改善点」に2分し、それぞれ異なった色の付箋に書き出した。研究協議での発言はすべて録音され、付箋によるコメントも保存された。

2.3　分析方法―付箋分類のフレームワーク

付箋を分析するにあたり、以下の表１「英語授業研究のためのフレームワーク2.1」（望月・小菅 2017b）をもとに分類した。

表１　英語授業研究のためのフレームワーク2.1（望月・小菅、2017b）

1　英語教師の資質・能力	
（A）教職者としての資質	ア　問題に対する柔軟な対応
	イ　教育に対する情熱・熱意
	ウ　学習者の理解・把握
	エ　教員間の連携
	オ　その他
（B）英語運用能力	ア　発音
	イ　語彙
	ウ　文法
	エ　リスニング能力
	オ　スピーキング能力
	カ　リーディング能力
	キ　ライティング能力
	ク　その他
2英語教授力	
（A）授業デザイン	ア　目標：授業の目標・活動の目標
	イ　教材：読み込み・解釈・自主教材（リスニングスクリプト・リーディングテキスト）の作成
	ウ　教具（視聴覚教具・ワークシートなど（レイアウトや解答欄など内容以外について））
	エ　指導・活動の設定（4技能・文法・語彙・発音・音読・言語文化などの指導・活動の妥当性、指導・活動の提案など）

	オ　授業構成（指導手順・活動間の関連・時間配分など）
	カ　評価
	キ　板書計画
	ク　リハーサル
	ケ　その他
（B）授業実践	ア　授業運営（人や物の配置・時間管理・学習者の観察・学習者への対応・学習者との応答・活動の追加など）
	イ　指導技術（話し方・目線・説明・例示・指示・発問・指名・理解の確認・言い換え・フィードバック・誤り訂正・板書・机間指導など）
	ウ　学習者の行動：活動への取り組み・英語使用・自主性など
	エ　評価
	オ　その他

３．結果と考察

3.1　付箋コメントの集計結果

6回の研究協議で、付箋に書かれたコメントの内容の推移は表２の通りである。

表2　付箋数の推移

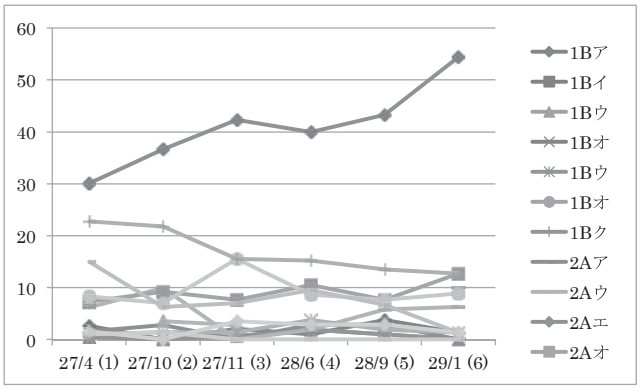
授業日	（1）27/4	（2）27/10	（3）27/11	（4）28/6	（5）28/9	（6）29/1
授業研究協議の参加者	11名	9名	10名	8名	8名	7名
良い点（総数）	53	37	28	33	32	35
良い点（1人当たり）	4.8	4.1	2.8	4.1	4	5
疑問・改善点（総数）	138	105	113	71	71	44
疑問･改善点（1人当たり）	12.5	11.7	11.3	8.9	8.9	6.3
総数	191	142	141	104	103	79
総数（1人当たり）	17.4	15.8	14.1	13	12.9	11.3

（注）授業日の欄：（1）27/4　は第1回・平成27年4月実施を表す

3.2　フレームワークごとの集計結果

フレームワークの項目に即して、付箋を分類すると以下のようなグラフが得られる。

グラフ１　フレームワークの項目ごとの推移



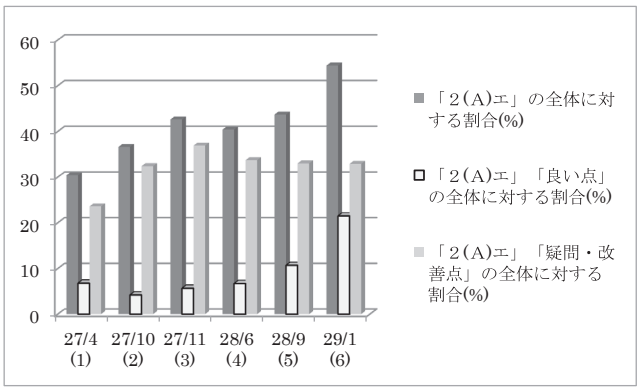
「２（A）エ」（２：英語教授力・(A)：授業デザイン・エ：指導・活動の設定）に関するコメントの割合が圧倒的に高いことがわかる。これにより、当該の教師にとって（また、授業観察者の目からも)、「２（A）エ」の項目が、授業の変容・改善、ひいては教師としての成長に大きく影響する可能性が高いことが推測できる。また､フレームワークの「１」(英語教師の資質･能力）にほぼ問題がなく、教育環境や生徒の側に、授業を行う上であまり問題がないことも示していると考えられる。

3.3　フレームワーク「２（A）エ」に関わるコメントの分析

3.3.1　概要

前述のような理由から、ここでは、「２（A）エ」に分類されたコメントに着目して分析する。グラフ２は、各回の授業について、3本の棒グラフが示されているが、左から順に、「２（A）エ」の全体に対する割合（%)、「２（A）エ」「良い点」の全体に対する割合、「２（A）エ」「疑問・改善点」の全体に対する割合を示している。

グラフ２　フレームワーク「２（A）エ」の「良い点」「疑問・改善点」の割合



3.3.2 「２（A）エ」「良い点」の分析

「良い点」は回を追うごとに増えていく傾向が見られ、授業観察者の印象とも合致する。具体的に、どのような点を「良い点」としてコメントしているかについては、次の２つの大きな柱にまとめることができる。

（1）コミュニケーションにつながる活動・生徒主体の活動

（2）指導の適切さ：十分な指導、目的が明確な指導

当該の教師については、この２点が、授業改善、ひいては教師としての成長の重要なポイントであると考えられる。以下、具体的なコメント例を示す。

（1）コミュニケーションにつながる活動・生徒主体の活動

「コミュニケーションを円滑にする表現を練習させたのはよい」（第１回）
「身近なキノコの話題をスモールトークで取り上げていた」（第１回）
「ウォームアップで友達と話し合わせている」（第１回）
「前回の復習を生徒のペア活動ではじめている」（第３回）
「生徒が自己表現する機会が与えられている」（第４回）
「生徒の考えを英語で表現させている」（第６回）

（2）指導の適切さ：十分な指導、目的が明確な指導

「自己評価をさせている。自分でふりかえることができる」（第１回）
「音読練習で、全体、各自、ペア、個人といろいろな方法でしっかりと読ませられた」（第１回）
「音読で生徒が読みづらいフレーズはもう１度読ませていた」（第２回）
「なぜFalseなのかを確認している」（第３回）
「目的を与えてビデオを見させていた」（第５回）
「生徒が苦手な発音を丁寧に繰り返している」（第５回）
「リスニングの目的を与えている」（第６回）

3.3.3 「２（A）エ」「疑問・改善点」の分析

観察者の印象として、授業は改善されていったが、「疑問点･改善点」は、前半３回（平成27年度、3年生対象）については、回を追うごとに増加傾向が見られ、後半３回（平成28年度、1年生対象）については、ほぼ横這いである。授業が改善されているのであれば、「疑問点・改善点」も減少してもよいはずであるが、回を追うごとに観察者の要求水準も上がっているといった要因も考えられる。

「疑問点・改善点」のコメントとしては、やはり、「良い点」の裏返しとして「指導の適切さ」に関する指摘が多い。以下に具体的なコメント例を挙げる。

「書いてまとめたものを読んでグループ発表でよいのか」（第１回）
「音読：ペアで交互に読ませることの意味は？」（第２回）
「十分理解しないまま生徒は音読をさせられていないか」（第３回）

「複雑な構造の文を生徒は理解しているか」（第３回）
「長い語やフレーズは分解して練習するといいのでは？」（第３回）
「Further Questionの質問がやや漠然として答えにくいのでは」（第４回）
「3回聞かせる必要はなかった」（第６回）
「CDを聞かせる前に、もう少し状況を説明する必要はなかったのか？」（第６回）

４．結論と今後の課題

本研究で、継続的な授業研究協議とフレームワーク（望月・小菅 2017b）の活用により、当該教師について明らかになったことは、次の２点である。

（1）フレームワーク「２（A）エ」（英語教授力－授業デザイン－指導・活動の設定）が授業改善のために特に重要な項目であり、「指導の適切さ」がポイントである。
（2）上記（1）の前提とも言える、英語教師としての基本的な資質･能力や英語運用力（フレームワーク「１（A）（B）」）には、ほぼ問題がない。

授業研究は、1回限りではなく、継続的に行うほうが効果的であるのは明らかである。また、授業研究協議が、現状でよく行われているような単に意見を述べ合って終わり、という形にとどまらずに、コメントの系統的な分析を行うことによって、さらに説得力が増し有効なものとなる。本稿で示した付箋によるコメントの分析は、そのひとつの可能性を示していると考える。フレームワークを活用して分析することにより、授業の内容や傾向、変化の様子などが明らかになり、授業研究協議がより示唆に富んだものになるであろう。

授業には非常に多くの変数が存在する。授業そのものにとどまらず、授業観察者自身の経験・力量・授業観といったものも、当然のことながらコメントに反映される。その点も踏まえて、付箋とフレームワークによる分析から何が読み取れるのか、何が読み取れないのかなど、さらに研究を重ね、より建設的で有意義な授業研究協議のありかたを探る必要がある。フレームワークで授業に関わるあらゆる要素をカバーできるわけではないが、付箋によるコメントとフレームワークに基づいた分析によって、授業の実態が少しでも明確に見えるようになり、授業改善や教師の成長に寄与することを期待したい。

※本研究は、平成27-29年度科学研究費基盤研究（C）（課題番号15K02791）の支援を受けた研究の一部である。

引用文献

小菅敦子（2017）「第5研究グループ 授業研究」『語研ジャーナル第16号』一般財団法人語学教育研究所、91-93
村川雅弘（2010）.「ワークショップ型授業研究の手法」村川雅弘（編）『「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる　学校を変える』（pp.62-71）東京：教育開発研究所.
望月正道・小菅敦子（2016）.「若手教師と熟練教師は授業研究で何に注目しているか―英語授業研究のためのフレームワークを用いた付箋分析―」 第42回全国英語教育学会埼玉研究大会自由研究発表　平成28

年8月20日　獨協大学
望月正道・小菅敦子（2017a）.「英語授業研究のためのフレームワーク」『中部地区英語教育学会紀要46』、141-148.
望月正道・小菅敦子（2017b）「英語授業研究のためのフレームワーク改訂」
第47回中部地区英語教育学会長野大会　自由研究発表　平成29年6月25日　信州大学